『アヴァダーナ・シャタカ』の定型句について

出本充代

もともと口承によって伝えられていた仏教文献は、記憶を助けるために繰返しを好む傾向がある。このような繰り返しの文句が次第に固定化して、同じ内容・言い回し・語形をもった定型句になると、それが定型化された状況に応じて、時代や地域、部派などの違いを反映するようになる。従って、定型句を調べることで、その文献の成立の状況や伝播の過程、所属部派などを知る手がかりが得られる可能性がある。例えば、同一もしくは類似の定型句を使用している文献は相互に関連があると推定され、また、一つの文献内において定型句が不統一な場合は、その文献内に新古の層があることが予想される。

根本説一切有部に属するとされる仏教説話集『アヴァダーナ・シャタカ』（以下、*Avdś.*）にも長短さまざまの定型句が大量に使われている。*Avdś.* の定型句には『根本説一切有部律』や同律を主な出典とする説話集『ディヴィヤ・アヴァダーナ』（以下、*Divy.*）と共通のものが多いことは既に指摘されており、*Avdś.* が両文献と近い関係にあることが確かめられる。また、*Avdś.* の現行梵本は内容的にも文体的にもまとまりがあり、全体がほぼ同時に成立したという印象を与えるが、一部に不統一な定型句が見られ、その部分が後代の挿入であることを示唆している。定型句を利用した文献研究の一例として、このような *Avdś.* 内部における定型句の問題について述べたい。

Avdś. は十話×十章＝百話という整然とした構成をとり、梵本・蔵訳・漢訳の三伝本がある。蔵訳は梵本と同じ発展段階に属し、ほぼ逐語的に対応する。一方、漢訳の『撰集百縁經』は梵本・蔵訳よりも古い内容を伝える。梵本と漢訳の収録説話を比較すると、配列の順序がやや異なり、四話（梵本の No. 24, 25, 36, 78／漢訳の No. 24, 30, 40, 80）が互いの対応を欠く。漢訳の方の四話は内容が各章のテーマに合わないことから、後代の挿入であることは明らかである。梵本の方の四話は漢訳ほど不自然ではないものの、いくつかの問題点を指摘しうる。その一つが定型句の違いであり、特に No. 24・25 に顕著に見られる。以下に問題となる定型句を *Avdś.* の基本的な定型句と対照させて、三種に分けて示す。なお、テキストは次のものを使用した。

・*Avadānaçataka, a century of edifying tales, belonging to the Hinayāna (Bibliotheca Buddhica III)*, 2 vols., ed. by J. S. SPEYER, St. Petersburg 1902-1909.

・*Divyavadāna, a collection of early buddhist legends*, ed. by E. B. COWELL & R. A. NEIL, Cambridge 1886.

(1) 別の定型句を使用

・誕生際～命名の場面

【基　本】 tasya jātau jātimahaṃ kṛtvā nāmadheyaṃ vyavasthapyate kiṃ bhavatu dārakasya nāmeti/ jñātaya ūcuḥ/ yasmād *reason* tasmād bhavatu dārakasya *name* iti nāmeti// (No. 3 他、計28回)

【No. 24】 śramaṇabrāhmaṇanaimittikānāṃ nivedya <u>trīṇi</u> <u>saptakāny ekaviṃśati divasān</u> jātasya jātimahaṃ kṛtvā

daśaśirā iti nāmadheyaṃ kṛtavān// (p. 135, ll. 10-12; Cf. *Divy.* p. 3 etc.)

・富裕な人の描写

【基本】 *somewhere someone* [prativasati] āḍhyo mahādhano mahābhogo vistīrṇaviśālaparigraho vaiśravaṇadhanasamudito vaiśravaṇadhanapratispardhī/ (No. 1 他、計38回)

【No. 25】 āḍhyo mahādhano mahābhogo prabhūtavittopakaraṇaḥ prabhūtasattvasvāpateyaḥ prabhūtamitrāmātyajñātisālohitaḥ/ (p. 139, ll. 6-7; Cf. *Divy.* p. 291)

(2) 基本定型句から逸脱

・導入句

【基本】 buddho bhagavān satkṛto gurukṛto mānitaḥ pūjito rājabhī rājamātrair dhanibhiḥ ―中略― lābhī cīvarapiṇḍapātaśayanāsanaglānapratyayabhaiṣajyapariṣkārāṇāṃ saśrāvakasaṅghaḥ

somewhere did something// (全話冒頭)

【No. 24】 ―略― saśrāvakasaṅgho Magadheṣu janapadacārikāṃ caran Gaṅgātīram anuprāptaḥ sārdhaṃ bhikṣusaṅghena/ (p. 134, ll. 2-6)

・王様と王国の描写

【基本】 rājā rājyaṃ kārayati ṛddhaṃ ca sphītaṃ ca kṣemaṃ ca subhikṣaṃ câkīrṇabahujanamanuṣyaṃ ca praśāntakalikalahaḍimbaḍamaraṃ taskararogāpagataṃ śālīkṣugomahiṣīsaṃpannaṃ dhārmiko dharmarājo dharmeṇa rājyaṃ kārayati/ (No. 21 他、計5回。Cf. *Divy.* p. 282)

【No. 24】 ―略― dhārmiko dharmarājo dharmasthito dharmeṇa rājyaṃ kārayati/ (p. 134, ll. 11-14)

(3) 異なる語形を使用

・ブッダに出逢う場面

【基本】 athâsau dadarśa buddhaṃ bhagavantaṃ dvātriṃśatā mahāpuruṣalakṣaṇaiḥ samalaṅkṛtam aśītyânuvyañjanair virājitagātraṃ vyāmaprabhālaṅkṛtaṃ sūryasahasrātirekaprabhaṃ jaṅgamam iva ratnaparvataṃ samantato bhadrakam/(No. 1 他、計42回)

【No. 24】 dadarśa → paśyati (p. 137, ll. 12-14)

・富裕な人の描写

【基本】 [前出] (prativasati を含むものは No. 1 他、計5回)

【No. 36】 prativasati → babhūva (p. 195, ll. 4-6)

以上のような定型句の相違が認められ、No.24・25が周囲とは別の層を成していることがわかる。この場合、(1)は積極的な根拠として用い得るが、(2)と(3)は写本による伝承上のミスにすぎない可能性も十分にあるので、状況証拠程度の効力を持つに留まる。これらの相違点を中心に総合的に判断すると、*Avdś.* の No. 24・25は後代の補充であると言える。